

いま、久しぶりにキャピトル盤の『ブラック・サテン』を取り出して聴いたところである。懐かしい。ジョージ・シアリング・クインテットとオーケストラ。アレンジがピリー・メイとジョージ・シアリング。

オリジナル盤である。裏を見ると4ドルのシールが貼ってある。レコード・エクステンジで買ったのである。この店名の店はアメリカ各地にあるが、どこで購入したのかは定かではない。

ジャズの廃盤ツアーでわざわざアメリカまで行って「立派なジャズ」ではない『ブラック・サテン』を買ったのにはわけがある。私はいま、しげしげと眺めているが、ジャケットのすばらしさに実にもう想像を絶するものがあるのである。

女性だ。年の頃は30代の前半か、少し口許をゆるめて、床に両手をつき、私を凝視しているようであるが焦点は定まっていない。見ものと言えば彼女のまとっているゴージャスなコスチュームだ。サテンなのである。黒いサテン。床一面に広がっている。日本語で緞子（しゅす）。彼女が身につけたスカートなのか敷物なのか判然としない。しかし、とにかくジャケット一面、美女とサテン。題して『ブラック・サテン』

高校生の頃から欲しくてたまらなかったのである。しかし、「立派なジャズ」に精一杯でこうしたアルバムを買う余裕がなかった。そしていつしか記憶の中から消えていった。アメリカで記憶がよみがえったのだった。

さて、そろそろ皆さんのイラダチが見えるようである。なぜ長々とイントロで『ブラック・サテン』を引用したのか。

最大の理由はこれである。すなわち、である。本アルバムが発祥の地が実はここにあったのである。

『ブラック・サテン』を現代によみがえらす。いや、その言い方は正確を欠いたものだ。現代の『ブラック・サテン』をつくり出す。まさにそここのところにあったのである。

実は、私は驚いたのだが、ヴィーナスのオーナーがなんと「ブラック・サテン好き」だったのだ。彼を含めロートルジャズ・ファンにはジャケットを含めて秘かなブラック・サテン好きが何百人もいるのである。

オーナーは以前から「ニュー・ブラック・サテン」の構想をあたためていた。「よし、いつかやってやるぞ」心中秘かに燃えるものを保持していたのである。機が熟した。そうだ、エディ・ヒギンズにやらせよう。このところトリオ物が続いている。ソロ盤も作った。ここは一発、ウィズ・ストリングスでゆこう。気分転換が必要だ。新しい発見もあるだろう。

何度も言うようにそこで出来上がったのが、このアルバムである。

皆さんはどのようにお聴きになったであろう。私は先述したように『ブラック・サテン』のオールドに対してこちらはニュー。

このCDは今の空気の中で脈々と息づいているのである。

世の中には一握りのへそ曲がりがいる。オリジナルを尊ぶ人たちである。「最初」にすべて価値を置くのである。リメイクはまがい物だとする、そういう評価しかできないジャズ・ファンの人々たちだ。これをドーンと目の前に突き付けて聴かせてやりたいものだ。

Moonlight Becomes You
ムーンライト・ビカムズ・ユー

Eddie Higgins Quintet with Strings
エディ・ヒギンズ・クインテット・ウィズ・ストリングス

1. ホワット・イズ・ゼア・トゥ・セイ
What Is There To Say (V. Duke) (4:16)
2. ムーンライト・ビカムズ・ユー
Moonlight Becomes You (J. Van Heusen) (5:06)
3. 丘に住む人々
The Folks Who Live On The Hill (J. Kern) (7:32)
4. アイ・フ・シュッド・ルーズ・ユー
If I Should Lose You (L. Robin) (4:11)
5. 愛は海より深し
How Deep Is The Ocean (L. Berlin) (4:15)
6. ミス・ジョーンズに会ったかい?
Have You Met Miss Jones? (R. Rodgers) (3:54)
7. アイル・ビー・アラウンド
I'll Be Around (A. Wilder) (6:19)
8. ニアネス・オブ・ユー
The Nearness Of You (H. Carmichael) (4:51)
9. ビー・ケアフル・イット・マイ・ハート
Be Careful, It's My Heart (L. Berlin) (5:05)
10. ホエン・エイプリル・カムズ
When April Comes (E. Higgins) (4:00)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins (piano & quintet arrangement)
ジョー・ロック Joe Locke (vibes) ジョー・コーン Joe Cohn (guitar)
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass) ジョー・アッシュオーネ Joe Ascione (drums)
ディック・リーブ Dick Lieb (conductor & string arrangements)
Harumi Rhodes, Svetlana Tsoeuna, Edith Hines (violins)
Lois Martin, Shmuel Katz (violas)
Charles Curtis, Andre Emelineoff (cellos)

録音：2003年8月26, 27日 ニューヨーク、アヴァター・スタジオ

© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

★

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan .
Recorded at Avatar Studio in New York on August 26 and 27 , 2003.
Engineered by James Farber. Pro Tools Engineer by Dave Darlington.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Cover Photo : © Irina Ionesco / G. I. P. Tokyo. Photo by John Abbott.
Designed by Taz..

さて、本盤アルバムの核心的サウンドはジョージ・シアリング・クインテット・サウンドである。言わずもがなだが、1940年代後半から一世を風靡したシアリング・サウンド。

ポップ・ミュージック界にグレン・ミラー・サウンドがあるように、ジャズ界にはジョージ・シアリング・サウンドという独特なサウンドが存在する。クラリネットをリード楽器に用いて「あの音」を出したグレン・ミラーに対してシアリングはピラフォンとギターとピアノを揃えて演奏することで、それまでにない特有のサウンドを出現させた。偶然見つかったのかもしれない。狂喜したことだろう。ジョージ・シアリングは、自身のピアノよりこのサウンドで有名になったミュージシャンである。

本盤のビブラフォン奏者はジョー・ロック、そしてギターがアル・コーンの息子のジョー・コーン、『ニューヨーク・トリオ』で男を上げた!?老練ベーシストのジェイ・レンハート、そして新進ドラマーのジョー・アルシオーネ。そのクインテットを中心軸に14人(7人×2)のストリングス・セクションが連動するという寸法だ。大所帯である。

「お金がかかったでしょう」私がオーナーにそう質問すると、電話の向こうの彼は、ちょっと苦笑いして「でも僕が好きでやったんだから」

儲けようと思ったら人件費節約でソロ盤を出せばいい。というのは冗談だが、出費が増えても昔から願っていた壮大な音楽を作ってみたという心意気。よいしょでもなんでもなくこは替めてあげなくては。「偉いなあ」私は思わず声を上げていた。これは心意気の作品である。

そういえば、こんなことも漏らしていた。「売れなくてもいいんです」。
自分のやりたいことをやったという達成感と爽快感がそう言わせての
だろう。

先の一部の人たちの話に戻れば、ヴィーナス・レーベルをコマーシャルのレーベルと決めつける人が少なくない。

私の考えるコマースシャルのレーベルとは売れることだけを第一主義に作った作品の多いレーベルである。以上のような理由で、ヴィーナスはそうしたレーベルではないということがわかりだろう。誤解を招きやすいレーベルには違いないが、根本は純正、独立独歩レーベルだ。

さて、もし私が20年前の私だったら、このような内容の事柄をした
ためることができたでしょうか。

否、である。20年前の私はジャスを純正ジャズとコマーシャル・ジャズに分け、純正のみを尊敬していた。50歳を過ぎて世の中のことが少しずつわかり始めると、ようやくジャズの深いところのことも理解できたのである。純正も不純もない。そういうことをである。純正がジャズだと標榜、連呼する自分が格好よく見えただけの話。

であるから、40歳の私ではこのライナーノートは書けなかったであろう。今は大イバリで書けるのがうれしい。ジャズ・ファンとして成長したのであるから。

本アルバムは実に格好いいジャズである。いや、音楽である。その一言に尽きる。ジャズとかジャズでないとか、そんな狭い見で聴く音楽ではない。どっかりと椅子に腰を下ろし、あなたを目がけて襲いかかるビック・サウンドをどっかりと受けとめればいい。理屈を捨ててサウンドで聴く音楽。そして旋律の美に酔う音楽。

タイトル曲から聴き出して途端に私はしびれてしまった。出だし、である。これはグレン・ミラーの「ムーンライト・セレナーデ」ではないか。

ちなみに『ブラック・サテン』の兄弟盤『ホワイト・サテン』に入っている同曲を聴いてみると、これが見事に出だしがベートーベンの「月光」なのだ。アレンジャーがニヤリとするのが見えるようである。アレンジャーのディック・リープは「セサミ・ストリート」などで大きく貢献した人だという。

私はジミー・パン・ヒューゼンのベスト作と思っているが、「ムーン
ライト・ピカムズ・ユー」という曲には隠れファンが多い。私もその
一人であり、オーナーもそのようであった。パン・ヒューゼンの曲想
は派手さが無い。あるのはいつまでも心に残る味わいの深さである。
まさにシアリング・サウンド・ウィズ・ストリングスに打ってつけの
曲ということだ。

そうした意味では、全曲味わいが深い。エディ・ヒギンズ作曲の「ホエン・エイプリル・カムズ」しかり。

エディ・ヒギンズは以前、自分はすごく幸せであるというような話をしていた。同じピアニストでいえばハロルド・メイバーンもそうなのだが、日本のレーベルが自分たちのCDを作ってくれる。そのことが嬉しい、と。第二期黄金時代を迎えることが出来た、と。

ジャズ・ミュージシャンにとって、ストリングス付きで演奏することは大変に幸せで名誉であるらしい。エディ・ヒギンズはこの盤でハッピーを味わったのである。喜びがひとしおであったろう。そのうれしい気分で、勢いをつけてまた古巣のトリオ物を吹き込んでゆく。

この作品はこれから続々と吹込まれてゆくトリオ作品の大きなバネになるはずである。